

田村 隆（国語学・国文学）

省筆論 ー源氏物語の修辞法ー

本論文は、平安朝の物語文学作品においてしばしば現れる「省筆^{しょうひつ}」という修辞法について、『源氏物語』を中心に考察したものである。「省筆」とは、物語の叙述を途中で中止する「うるさければ書かず」、「くぐださなければ漏らしつ」といった表現を指す。尚、本論を構成する全8章のうち、6章分は既発表のものであり、残り2章と緒論は書き下ろしである。

『源氏物語』研究は、戦後数十年間にわたって、文献学的研究のほかに、主題論、成立論、人物論、構想論、注釈史研究、テキスト論、王権論、ジェンダーなど、様々な角度からの研究が相次いだ。しかし、いずれの研究も今日においては精密化すると同時に研究の細分化の弊を免れず、ある意味では研究の行き詰まりが指摘される状況にある。本論文は、そのような袋小路に行き詰まった感ある今日の『源氏物語』研究の弊を打破すべく、『源氏物語』そのものに立ち返って、その本文、表現を対象として『源氏物語』さらには平安時代の物語の本質を新たな角度から探ったものである。

文学研究は一般に、作品に「何が書かれているか」という観点に立って、「書かれていること」の意味を問うものである。それに対して本論文は、「省筆」という技法によって『源氏物語』において「書かれなかったこと」に光を当て、そのことを通して「書かれていること」すなわち作品の意味を浮き彫りにしようとする試みである。

「第一部 省筆の系譜」においては、レトリックとしての省筆の分布を詳細に論じている。そのうち、「第一章 省筆論ー源氏物語の叙法ー」では、古典文学作品における省筆の例を広範にわたって調査した結果、省筆の叙法は二つの淵源を持つことを述べ、さらに和歌や古記録などの例からこの修辞法が「私性」と関わっている可能性を指摘した。続く「第二章 夕顔以前の省筆」では、省筆のレベルに「書かない」という単なる記述放棄の宣言から、自分の立場では「書けない」という弁明まで多彩であると述べている。省筆が持つ「書かない」、「書けない」という構図に注意を払いつつ、物語内でその分布がどのように展開しているかを論じている。「第三章 「用なさにとゞめつ」考ー紫式部日記の贈答歌ー」では、『紫式部日記』に見られる省筆の考察ならびに『源氏物語』との比較を通じ、物語と日記とが本来的に省略の基準を異にしているとの極めて示唆に富む指摘をなした。これらの知見は今後の物語研究に新たな視座を与えるものである。

また、「第二部 省筆の享受と展開」のうち、「第三章 与謝野晶子訳『紫式部日記』について」と「第四章 省筆の訳出ー「晶子源氏」の再検討」では、省筆に対する意識が古典文学作品の口語訳という局面において顕著に現れた例を考察する。省筆への対処という観点から、与謝野晶子における『源氏物語』と『紫式部日記』両訳業に注目し、晶子が省筆のレトリックを嫌っていた可能性を指摘した。その過程で、与謝野晶子が使用した『紫式部日記』のテキストを清水宣昭『紫式部日記釈』と推測するなどの実証的成果を挙げる一方、省筆の訳出にあたり、『源氏物語』が持つ複層的な語りの構造をわかりやすく叙述しようとする晶子の工夫が窺える点を明らかにした。このような指摘は与謝野晶子研究においてもなく、近代文学研究をも視野に入れた、今後のさらなる進展が期待される。

以上のような観点から、本委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。